

「古都」の復興

— 近代日本における「奈良」という語り —

桐原 健真

はじめに — 奈良と鹿と大仏と

いにしへの 奈良の都の 八重桜

今日九重に にほひぬるかな



一勇齋国芳（歌川国芳）「伊勢大輔」（部分）
『小倉擬百人一首』1846頃、

百人一首にも収められているこの歌を詠んだのは、平安中期の女流歌人である伊勢大輔（10C末～11C中ごろ）。1008年ごろから、一条天皇女御の中宮彰子（上東門院）に仕えた人物である。奈良・興福寺から送られた八重桜の授受役を先輩の女房の紫式部から譲られ、まだ新参であった彼女がその場で詠んだのがこの歌であったという。「いにしへ」と「今日」という時間的な対語とともに、「八重桜」がやってきた「奈良

の都」に対する「九重」（＝宮中）という空間的な対語が用いられるなど、技巧的にも優れたものとなっている。

しかしここで注目したいのは、この歌の文学的な価値ではない。むしろ「新都」である京都に対する「古都」として奈良を位置づけるメンタリティ（心性）である。むしろ奈良を「古都」と称すること自体は今日でもさほど不思議なものではないだろう。というのも、1966年に制定された「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（古都保存法）において、明確に「古都」として規定されているからである。

第二条（定義） この法律において「古都」とは、わが国往時の政治、文化の中心等として歴史上重要な地位を有する京都市、奈良市、鎌倉市及び政令で定めるその他の市町村をいう。

2 この法律において「歴史的風土」とは、わが国の歴史上意義を有する建造物、遺跡等が周囲の自然的環境と一体をなして古都における伝統と文化を具現し、及び形成している土地の状況をいう。

古都保存法では、このように京都を筆頭に、奈良・鎌倉と日本歴史上の時代を画した政治都市を法令上の「古都」と位置づけ、これらが歴史

的建造物や遺跡とこれを取り巻く自然的環境と一体となって「古都」の「伝統と文化を具現」しているのだと規定している。なるほど「千年王城の地」たる京都是、これにまつわる長い歴史と自然環境との関わりをなかで今日も存しており、また約700年にわたる幕府体制の発祥地である鎌倉もまた、寺社仏閣やこの地を防衛するための地理的環境―「鎌倉七口」―などを含めて、「古都」としての空間的特質をよく残している。しかしこれに対して、奈良は、「古都」としてのどのような特徴があるのだろうか。

「奈良」と言われて想起されるものは、「古都」としての文化的空間よりは、鹿や大仏といった「モノ」であることは否定できない事実であろう。平城遷都1300年祭にあわせて発表された「せんとくん」(藪内佐斗司)が鹿の角が生えた童子(仏教的な意味でのそれ)の姿をしていることは、まさに象徴的であろう。あるいは近畿出身の代議士からも次のような発言がある。

一番下に書いてあります奈良公園について、私、紹介したいと思っております。ここは、奈良は鹿と大仏で有名なんですけれども、文化財保護法や古都保存法、奈良市風致地区条例の第一種風致地区に指定されております。(2017年4月12日、衆議院・国土交通委員会における清水忠史衆議院議員(大阪4区、近畿比例選出・共産党))

本来この発言は、奈良公園の開発に関する文脈でなされたものであったが、ここでは、奈良公園という一区画に留まらず、「鹿と大仏」というイメージが奈良一般にまで拡大されていることが分かる。これは、必ずしも大阪出身者だからというわけでもない。たとえば、「奈良生まれ

奈良育ちなのでいつか奈良が舞台のマンガを描きたいなと思っただけ」というマンガ家が執筆した作品が、「大仏顔のJK(女子高生)」としゃべる鹿のマンガであったのであるから、「鹿と大仏」というイメージは、奈良出身者においても共通したものであるとも言える(雪野下ろせ『ならしかたなし』白泉社、2018年、141頁)。

こうしたモノに収斂してしまふ奈良イメージのある種の貧困さは、結局のところ、奈良という文化空間そのもののイメージしがたさ由来しているといつてよい。

もとより、このような奈良イメージを拡大再生産するような『ならしかたなし』であっても奈良が「古都」という特性を有していることは認めている。しかし、「古都」であることは、「歴史的風土」とともに「伝統と文化を具現」しているはずなのだが、同書が奈良を「何もなし」と断ずるように、奈良が、文化空間としていかなる「古都」であるのかということは必ずしも明確ではない。

この「古都奈良」イメージの困難さにこそ、こうした奈良のイメージの貧困さの淵源があるのではないだろうか。本小論では、近代日本における奈良表象を検討することを通して、いかに奈良が「古都」性を喪失していったかを明らかにしていきたい。このことは、同時に、これからの奈良のあり方を考えていくことにも資することとなる。



雪野下ろせ
『ならしかたなし』1巻
白泉社、2018年

1 奈良こそ「古都」である

今日、京都が「古都」を代表する地として認識されることは論をまたない。しかしながら、伊勢大輔の詠歌が象徴するように、平安遷都以来、奈良こそ久しく親しまれてきた「古都」であり、こうした「古都奈良」認識は、おおむね近代以前には一般的なものであった。すなわち長らく文化的・政治的な中心地としてあり続けた京都は、なるほど「いにしえよりの都」であるにせよ、けっして「いにしえの都」ではなかったのである。

もとより明治に入り、江戸が「東京」となったことで、京都の「京都」たる所以が失われたことは周知の事実であろう。しかしながら、いわゆる「東京奠都」(1868)によって、いきなり京都が「古都」と認識されるようになったわけではない。一例として、硯友社同人として活躍したのち博文館に入り出版事業の拡充に尽力した大橋乙羽(1869-1901)が、その晩年——といってもわずか30歳だが——に発表した紀行『千山万水』(博文館、1899)を挙げておこう。

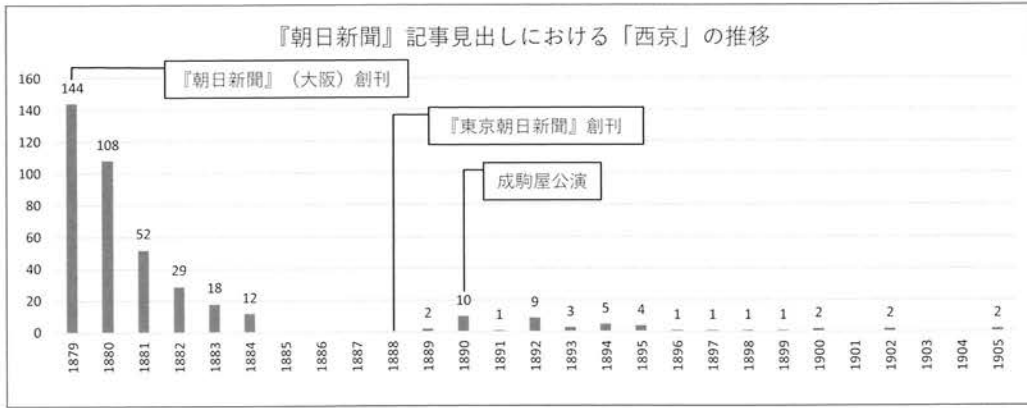
この『千山万水』には、「奈良の古都」という項目が立てられ、彼が遊歩した奈良の名所が書き連ねられている。一方で京都での観光は、「西京めぐり」という項目にまとめられている。大橋にとっての「古都」があくまで奈良であり、京都は「東京」に対する「西京」として認識されていたのである。京都が東京に対峙しうる「西京」としてある限り、京都はまだ「現役の都」であったといえる。しかしながらこうした「西京」認識は、「東京」がこの列島上において政治的・経済的のみならず文化的にも中心的地位を占めるに至り次第に変化していくこととなる。それは、「西京」という表現が次第に用いられなくなっていくことと軌を一にしていると言つてよい。試みに『朝日新聞』の記事見出しを例

に挙げると、以下のような推移にまとめることができる。

『朝日新聞』は1879年に大阪で創刊されたこともあり、その最初期には「西京」の表現が多く見られる。しかし、その頻出度は年を追うごとに低下し、1885年以降は現れなくなる。これに代えて用いられたのが、行政上の呼称としての「京都」であり、「西京」が再び現れるようになるのは、同社が星亨の『めざまし新聞』を買収し1888年7月に『東京朝日新聞』を創刊した翌年の1889年になる。しかしその数は年あたり10件を越えることはなく、やがて1910年(1件)を最後に十年単位で「西京」はその姿を消していくこととなる。

そうしたなかで、1890年が突出して多い(10件)ようにみえるが、これは、「西京北座」(四条北芝居)における成駒屋らの歌舞伎公演の記事が8件あったことによるものであり、1892年の9件も、その3分の1は歌舞伎公演に関するものとなっている。かつて京都は「くだりもの」ということばに象徴されるように、文化の発信地であった。しかし今やその地は、歌舞伎に象徴される東京からの新文化(この時期の歌舞伎は「古典芸能」ではなく最新の舞台芸術の一つであった)を受容する場となってしまったのである。かくて「東京」に対峙するかにみえた「西京」は、年とともにその地位を後退させていったのであり、これに代わって与えられた呼称が「旧都」であった。

1903年に明治法律学校から改称した明治大学が刊行していた『明治学報』(132号、1908年12月)に、「旧都古都」と題する随筆が掲載されている。著者は秋臯生(あきあき)こと田能村梅士(1867-1915)。明治法律学校卒で、『明治法学』(1899創刊)などの執筆兼編集を通して草創期の明治大学を支えたが、のちに読売新聞社や日本新聞社に入り文芸面でも活躍した人物である。彼は、京都を「旧都」と位置づけ、



(朝日新聞社『聞蔵II』を元に作成。なお、京都を呼称するものではない記事見出しは適宜除いた。)

次のように所感を記している。

時雨さそふ十一月二十三日
 京都に入り、数日を此地に
 送りぬ。春夏秋冬、いつ来
 ても善きは京都なり、天然
 善く、人工善く、人事善し。
 到る処滔々としてハイカラ
 的風潮の漲る世に、時とし
 て暫く此地の保守的なる事
 物に親しむも、亦少からぬ
 興趣あり。(秋暁生「旧都
 古都」、『明治学報』132号、
 1908年12月)

ここからは、「ハイカラ的風
 潮」にあふれた「東京」に対す
 る「保守的」な「京都」という
 構図がみてとれよう。それはか
 つてのような「東と西」といつ
 た空間的な対比ではなく、「新
 と旧」という時間的な対比であ
 り、まさに「開化」さらには「進
 化」が社会的指標となった時代
 を象徴しているといつてよい。
 こうした「新都・東京」の人間
 である田能村にとって、奈良は

「旧都」以上に時間をさかのぼった「古都」であった。東大寺の鎮守と
 して往古朝廷による崇敬を得ていた手向山八幡宮を訪れた彼は次のよう
 に、古都を彩る紅葉のさまを描き出している。

一千年外の古き都、到る処ものさびて、手向山八幡の朱楹丹柱を
 裏む「紅葉の錦」。近年幾樹をか植え添へて、坐ろに菅家の昔を
 偲ばしむ。真紅、褪紅、殷紅、爛紅、黄色、褐色、老い行く秋の
 沈着なる伝彩は、華やかなる、春の色よりも、古都を飾るに適する
 を覚ゆ。(同前)

「紅葉の錦」や「菅家」とは、百人一首にも収められた菅原道真の和歌
 「このたび「度・旅」は 幣も取りあへず 手向山「手向ける」との
 掛詞」紅葉の錦 神のまにまに」のことを念頭に置いたものである。
 京都から「旅」した道真のように、自分もまたこの紅葉の「古都」を
 訪れたのだ——と田能村は言う。彼にとつて、奈良はまさに「旧都」
 以上の「古都」であった。

こうした京都を「旧都」とし、奈良を「古都」とするような理解は、
 今日ではあまり一般的ではないだろう。それは、今日を生きる人々にとつ
 て、東京が「新都」となった記憶があまりにも遠くなってしまったから
 であるといつてよい。しかし、「京都」旧都「奈良」古都」という構図
 は、その後も久しく残り続けた。たとえば、1923年に刊行された
 高等女学校の国語読本教授資料には、「古都」といひ、旧都といふも、字
 義上はあまり変りはないが、習慣上古都といへば奈良を思ひ、旧都とい
 へば自ら京都をおもはせる(笹川臨風「古都の春」(原題「奈良の古都」)
 解説、『新撰女子読本教授資料』第5、明治書院、1923年、21頁、
 傍点引用者)と説いており、こうした構図が「国語」教育の現場におけ
 る「習慣」であったことを教えてくれる。

だがその一方で「旧都」としての京都の語りは、大きく変容しつつあった。そこには、新旧という対比のなかで、明らかにネガティブな「旧都」という呼称への抵抗感があつただろう。1910年代以降、京都の語りは、「西京」や「旧都」というような東京との対比を前提としたことばを用いない形でなされていった。すなわち「古都」としての京都である。

2 京都の変容…「旧都」から「古都」へ

1911年に創刊され、ながく俳句雑誌の中心的存在であった『層雲』（種田山頭火や尾崎放哉などが輩出、1992年廃刊）において活躍した高野月紅子（貞吉、1891～1932）が、関西を旅した際に詠んだ俳句が「古都めぐり」（『層雲』6巻2号、1916年5月）と題して残されている。掲載された11句のうち、京都に題を取ったものは、「松の影をかしくみて掃きゆく人か（大嘗宮）」や「ひかるものみなしづまりてまひるのどかなり（桃山御陵）」など6句であるのに対し、奈良を詠んだものは「俣のりこち松の葉が陽にそよぎをる（奈良）」「山肌のひかり頂きの雲うごくなり」の2句に留まっている（これ以外は天王寺など大阪での3句）。「東京寛都」よりすでに20年余を経た1891年に生まれた月紅子にとって、もはや東京が「新都」ではなかったように、京都は「西京」でも「旧都」でもなかったのであろう。まさに、明治の御代に生まれたものたちにとって、京都は「古都」であった。たとえば、日本が第一次世界大戦による好景気の余韻にひたっていた1919年4月に京都帝大で開催された医学系学会の様子を伝える記事は、「古都の春を彩どれる五個の医学大会盛況」と題して次のように「古都」を描き出している。

予報の如く去る四月一日から京大構内に於て、内科、外科、病理、眼科、小児科の五個の医学大会は開かれた……学会の景況はサスガに閑寂な京都だけに、東京に開かれる時の如き賑やかさはなく、人の出は割合におおいやうであつたが会場を繞る凡ての気分が余りパツとしなかつた。（傍点原文、『東亜医事』1巻3号、1919年4月）

京都は「閑寂」であり、東京のような「賑やかさ」がない。参加者は多いものの、会場の「気分」は「余りパツとしなかつた」のだとこの記事は伝える。こうした表現からは、筆者の「古都」に対する否定的な印象を強く感じるこゝとができる。それは「平素から一現（「一見」の客を相手にしない頑習ある旅館の主人）」に閉口したらしい筆者が、京都の「古さ」をあえて批判的に描き出した結果であつたかもしれない。

もとより、1904年の沢村専太郎作詞になる旧制第三高等学校寮歌「逍遙の歌・紅もゆる」（5番）にも、「嗚呼故里よ野よ花よ ここにももゆる六百の光も胸も春の戸に 嘯き見ずや古都の月」と唄われたように、



『承明門より紫宸殿を拜す』（部分）、市田オフセット印刷編『御大礼記念写真帖』日本電報通信社、1915年

「古都」としての京都という表現はすでに存在する。しかし、こうした表現が広く定着するには、ある祭典の挙行という事件が必要であった。すなわちそれが、1915年11月に京都御所紫宸殿で挙行された大正天皇の即位大典である。

大日本帝国憲法(1889)と時を同じくして制定された皇室典範(11条)には「即位の礼及大嘗祭は京都に於て之を行ふ」と記されており、即位大典が京都で挙行されることは、すでに決定事項であったことは言うまでもない。しかし典範制定後の20年の間に時代は大きく変わった。すでに二度にわたる対外戦争を経て、「一等国」となった日本におけるこの代替わりの儀式は、明治があまりにも大きな時代であったことも相俟って、朝野を挙げての一大イベントとして期待されたのである。中国仏教史研究者として知られる常盤大定(1870-1945)は、「古都の盛儀」という小文において、次のようにその期待を表明している。

今大正二年(1913)の秋十一月、古都に於て、古礼によつて、国家国民に取つての最極の盛儀が挙行せらるゝ。これを拝せんとて、世界の珍客が、古都に麤集するだらう。想像するだも胸の踊るは、何人も同じであらう。古都に於て、古礼によつての、深夜の盛儀、これには静寂と超脱と幽玄との三つの要素があつて、それが一つとなつて、必ずや参賀の内外人を、一如の世界に導く事であらうと思ふ。(常盤大定「古都の盛儀」1913年、『学と道』時潮社、1934年、381頁)

「古都に於て、古礼によつての、深夜の盛儀」には「静寂と超脱と幽玄」の「三つの要素」があり、これが「一つ」となつて、内外の参賀者を「一如の世界に導く事であらう」という表現には、みずからも仏教者(真宗大谷派)である常盤の思想的立場とともに、この即位大典に対す

る期待の大きさをみる事ができる。彼は、即位大礼を「国家国民に取つての最極の盛儀」と定義し、これが「古都に於て、古礼によつて」行われることが相応しいのだ、と主張する。こうした観念が、儀典を執行すべき由緒ある空間としての「古都」京都という認識をもたらしただのである。

しかしこの常盤が夢想した即位大典は、実際のところ、彼の言う「大正二年の秋十一月」には挙行されなかった。当初そうした案もあったが、明治天皇死去の翌年では近すぎるとの理由で、1914(大正3)年に実施される運びとなった。しかし昭憲皇太后が1914年に死去したことで、即位大典はさらに1年延期となつてしまい、1915年の秋に至りついに挙行に至つたのである。この間、京都市民は、ただただ「聖駕」を待つ日々を続けたのであるが、それは同時に「聖駕」を待つに相応しい都市空間へとみずから変身させる期間ともなった。京都は即位大典を契機に、歴史都市として固定化したのであり、かつての「新都」たる「東京」との対比の磁場にとらわれた「西京」や「旧都」といった語りから、「千年王城」という京都固有の歴史的な価値を前面にすえた「古都」としての語りへと転換していくのである。

3 奈良における「古都」性の喪失

このような「古都」としての京都の語りは、一千年来「古都」であり続けた奈良の位置づけにも大きな変化を与えることとなった。そうした変化を象徴的に表現する著作が、和辻哲郎(1889-1960)の『古寺巡礼』(1919)である。この書で、和辻が奈良に与えた呼称は、「南都」でも「古都」でもなく、「廃都」であった。

廃都の道 ひるから新薬師寺へ行つた。道がだんだん郊外の淋しい所へはいつて行くと、石の多いでこぼこ道の左右に、破れかかった築泥つじが続いてゐる。その上から盛んな若葉がのぞいてゐるのなどを見ると、一層廃都らしいところもちがする。(和辻哲郎『古寺巡礼』1919年、岩波書店、38～39頁)

もとより和辻が「廃都」ということばを全面的にネガティブに用いているわけではない。今日でも廃墟趣味が一つのジャンルとして存在するように、かつてそこに暮らしていたであろう人々が去つてしまつた跡——廃墟——にはなにか人を惹き付けるところがある。それは、想像力で往古を補う自由を観るものを与えてくれるからかもしれない。そうした想像力を最大限に振るつたからこそ、和辻のこの著作は、いまに至るも「多くの読者を魅了し続ける永遠の名著」(『古寺巡礼』の初版を復刻したちくま学芸文庫〈2012〉の惹句)と呼ばれるのであろう。

とはいえ、和辻が訪れたのは、人の住まぬ全くの廃墟ではなく、生身の人間が生活する奈良であつたはずである。しかし彼は、新薬師寺に行つてもそこで勤行を務める僧侶たちの様子を描くことはしない(和辻とて秘仏の開扉の際には、彼らに世話になつたはずであるが)。彼にとつてもっとも重要なのは、本尊の薬師如来坐像(平安初期)や香薬師如来立像(白鳳期、盗難に遭うも2015年に右手のみが発見された)といった仏像たちであつた。いな、それらは一千年余にわたつて崇敬の対象となつてきた宗教遺物としてではなく、誇るべき日本古来の美術彫刻として彼の目には映つていたのである。

こうした態度をよく示しているのが、奈良帝室博物館(現・奈良国立博物館)の仏像展示に対する彼の批判であろう。彼は、「傑作」が「雑然と列べられている」ことへの不満を次のように書き記している。

……当事者に解かりいゝ言葉でいふと、「かういふ事は日本の恥である。かういふ事があるから西洋人が日本人を尊敬しないのである。」国宝といふ言葉をもつと生かして貰ひたい。日本の古美術に対しては、我々は日本民族の一員として、当然鑑賞の権利を持つ。この鑑賞のために相当の設備をしないのは、国宝の意義を没すると云つてゐる。(前掲『古寺巡礼』65頁)

仏像は、美術的価値があるがゆえに「国宝」とされるのであり、そうであるからこそ「日本民族」の「恥」とならぬよう展示が考えられるべきである——と和辻は主張する。ここで、仏像という宗教彫刻に対する彼の不敬虔さを議論することは、本稿の意図するところではない。むしろここでは、仏像を宗教的文脈から切り離し、美学的文脈において、しかもそれを「日本民族」というナショナルリズムと結合させて再定義した点にこそ注意を払うべきであらう。

とはいえ、こうした仏像のもつ意味をナショナルリズム的に再編成しようとする試みは、和辻によつて始められたわけではない。むしろそれは、和辻が「日本の恥」と批判した奈良をふくむ帝国博物館設置構想において、すでに企図されたものであつた。近代日本仏教史研究者の碧海寿広おほみとしひろは、初代帝国博物館総長であつた九鬼隆一くきりゅういち(1852～1931)の構想を次のように指摘している。

九鬼は、西洋諸国の王立博物館を念頭におき、帝国の博物館に不可欠の所蔵品は、皇室を中核とする国家の歴史を明らかにし、また日本文化の価値や美しさを、国内外にアピールするための文物であると考へていた。(碧海寿広『仏像と日本人——宗教と美の近現代』中公新書、2018年、31～32頁)

このように取蔵する美術品を国家・国民の宝として展示し、「西洋人」をして「日本人を尊敬」せしめようという意図は、帝国博物館の構想段階から存していた。そして、とりわけ美術的価値のある彫刻を仏像としてではなく、宗教的文脈から離れた美術彫刻として、数多く展示したのが奈良博物館であった。すなわちこの地には、明治初年の神仏分離にもなう廃仏毀釈や寺領没収によって経済的困窮に陥った諸寺院——これらの多くは経済的基盤としての「檀家」を有さなかった——が存在し、これらがそれまでみずから奉仕してきた仏像を奈良博物館に「寄託」したからである。こうして「寄託」された仏像たちは、もはや諸仏としてではなく、美術的価値のある彫刻として博物館で展示されることになったのであった。

こうした仏像の「変容」は、博物館のなかだけにとどまらず、奈良という空間全体においても展開した。和辻が新薬師寺を訪ねながら、僧侶の説教を聴くことも、本尊を参拝することもなく、ただ彫刻を鑑賞したことは、まさに象徴的である。『古寺巡礼』のなかで、彼は驚くほど「拜む」ことがない。唯一、と言ってよいのが、東大寺大仏殿の屋根の両端にしつらえられた「鴟尾」が「ほのかに、実にほのかに、淡い金色を放つてゐる」さまが「拝みたいほど有難かつた」という下りがある。しかし、ここでも彼は「拝みたいほど」とどまっておらず、実際に拝んだわけではなかったのである。

宿泊する「ホテル」を拠点として諸寺の堂宇・仏像巡りを続けた和辻にとって、その「巡礼」なるものは、決して宗教的なそれではなく、審美的な動機からの「巡見」であった。それは、奈良を仏者による実践の場としての宗教空間、あるいは生きた人間が日々を営む文化空間としてではなく、美術品が点在する巨大な博物館・美術館としてとらえる態度

でもあったと言えよう。奈良は、時間が凍結された「廃都」だったのである。

4 「廃都」と「南都」

こうした奈良を「廃都」ととらえる認識は、これ以降も、そのほど近い地に位置する「古都」である京都との対比のなかでより強く現れてくることとなる。それは、かつて東京都と比較されることで、「西京」さらには「旧都」と呼ばれた京都の構図と相似形をなしていると言つてよい。京都が「古都」となったことによつて、奈良は、「古都」の座を剥奪され「廃都」となつてしまつたのである。和辻とほぼ同世代の美術史家である板垣鷹穂（1894～1966）は、奈良と京都をともに「古都」であると認めつつも、その差異を次のように指摘する。

極端な云ひ方をすれば、奈良はむしろ廃都に近いのであるが、京都は日本歴史の展開に主要な役割を持ちつづけてゐたばかりでなく、現代に入つてからも、所謂「六大都市」の一つとして独自の生活を営んでるのである。（板垣鷹穂「古都」『思想』218号、1940年7月）

そもそも「都」という文字は、「人々の集まる場」という意味である。したがつて、1930年代には人口100万人を超えていた京都市と、同時期にようやく5万人を超えるに至つた奈良市とを比較したとき、後者を「都」と呼ぶことは難しいと言つてよいかもしれない。

しかしかつて奈良は「南都」と呼ばれた宗教都市として、その存在感を示し続けてきたはずである。そうした明らかな歴史性を有する奈良が

「廃都」とまで言われなければならなかったのには、それなりの理由があった。すなわち、神仏分離以降に進んだ宗教都市としての機能の喪失、そしてまたこの宗教空間を支えてきた「南都」の仏教に対する評価の低下である。とりわけこの列島における仏教の展開を、「日本仏教」の歴史として描くことを基調とするアカデミズムの語りにおいて、「南都」仏教の評価は必ずしも高くはなかった。

日本の学僧が独自の日本的教説を打樹て得たのは平安朝に入ってからであるが、奈良朝時代はその準備をなしたと云へるであらう。「第二章 奈良仏教の教学・一 古都六宗」、三枝博音・鳥井博郎『日本講座5・宗教』三笠書房、1937年、39頁

平安初期における最澄・空海それぞれによって開かれた天台・真言二宗こそが「独自の日本的教説」であり、「古都六宗」（三論・成実・法相・俱舎・華嚴・律）は、あくまで中国大陸からの移入にとどまり、次代の「準備をなした」のだ——という認識は、今日でも教科書的記述においてみられるところではある。しかし実際には、「南都」の諸宗がその宗教的实践において力を失っていたわけではない。むしろ、鎌倉時代に東大寺戒壇院の学僧であった凝然（1240～1321）が、「南都六宗」に加え「平安二宗」の歴史を『八宗綱要』（1268）の名の下にまとめ上げたように、「八宗」こそが、近代以前の「日域」（日本）における仏教の基本だったのである。

しかしこうした「八宗兼学」を至上とする仏教理解は、ナショナルリズムを基調とする近代学知のなかで解体されていった。すなわち、『八宗綱要』では附録でしかなかった「禅宗」と「浄土宗」をはじめとするいわゆる「鎌倉新仏教」こそが「独自の日本的教説」であると高く評価する傾向が、アカデミズムのなかで強くなったのである。こうした「日本

仏教」の語りのなかにおける「奈良仏教」の地位低下は、奈良という土地を、生きた宗教空間としての「南都」ではなく、凍結された往古の寺社の地としての「廃都」として強く認識させることになったのである。

おわりに——「古都」という語りの復興

「日本仏教」という語りのなかで、その地位を低下させた「南都」としての奈良のほかに、もう一つの「古都」としての奈良の語りも存在した。それは、上古より平安遷都にいたるまで、奈良盆地が「朝廷」の主要な所在地であったという「歴史」に基づくものであった。「陸軍砲兵少佐」の肩書で『聖徳太子讃仰』（1934）を著した林貞三は、「古都の追憶」という一節で次のように記している。

悠々たる二千数百年前の歴史は、邈としてその考証を綜求することは困難であるが、大和の地は皇祖神武天皇が『東に美地あり、青山四周す。其地必ず天業を恢弘して、天下に光宅するに足るべし、蓋し六合の中心か』『日本書紀』神武天皇即位前紀に拠る」と宣ひ、初めて、橿原の宮に即位せられ、建国の皇基を創め給ふた処で、我が帝国発祥の地である。

建国以来、一千数百年の間、歴代の天皇にして、此地に都し給ふこと前後二十余代、元明天皇和銅三年奈良遷都までに、皇都を遷さるること十数次に及び、奈良朝になつてからも、桓武天皇延暦三年山代の長岡に帝都新定まで、約八十年に及んだのである。（林貞三『聖徳太子讃仰』帝国教育会出版部、1934年、1～2頁、傍点引用者）

こうした肇国神話との関わりにおいて、奈良を「我が帝国発祥の地」



きりはら・けんしん

1975年茨城県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程後期修了、博士(文学、2004)。東北大学大学院文学研究科助教、金城学院大学文学部准教授等を経て、2016年より同教授。専門は近代日本倫理思想史。言説史研究。著書に『近代東アジアの経済倫理とその実践：渋沢栄一と張謇を中心に』(共編著、日本経済評論社)、『松陰の本棚：幕末志士たちの読書ネットワーク』(吉川弘文館)、『カミとホトケの幕末維新：交錯する宗教世界』(共編著、法蔵館)など。

と定義することは、此の地に「建国以来」の「皇都」たる特権的な「古都」としての地位を与えるものにほかならなかった。それは、奈良を、「千年王城の地」たる京都に対する「平城八十年の都」としてではなく、「建国以来一千数百年の都」としてのより長い歴史と高い価値を有する存在へと昇華させたのである。

しかしながら、1945年の敗戦にともなう皇国史観の終焉は、こうした肇国神話を中核とした「古都」としての奈良の語りの後退をももたらした。それは、この地に遍在する寺社や文化財相互を体系的に結び付

けて把握することを困難にさせるものであり、奈良という土地の「博物館」化をいっそう助長することともなった。しかし、奈良は決して人の住まぬ「廃都」でも、美術品が陳列された「博物館」でもない。そこは日々の生を営む人間の暮らす空間にほかならない。凍れる「博物館」としての奈良ではなく、そこに住まう人の姿がみえる文化空間としての奈良を描き出すことこそが、「古都」としての奈良の復興であり、そうした試みがいま改めて求められているのである。

(了)